「またいつか、アフリカに帰ろう。」

今回のケニア訪問は、夢の第一歩になりました。昔から国際協力に興味があったものの、実際日本とは違う世界に触れる機会がなく、ただ漠然と「貧しい」人たちのために働きたいと考えていただけでした。今回ケニア訪問のチャンスがあると聞いて飛びついてはみましたが、正直最初は海外に行ったこともないのに初めて訪れるのがケニアで大丈夫なのか不安だったし、予防接種などわからないことだらけであたふたしていました。ただ、日本に帰って来た今は、実際ケニアに行ってみて本当に行って良かったと心から思います。

まず、「途上国＝貧しい、先進国＝豊か」という考えがいかに狭く間違ったものであるか身にしみて感じました。５泊６日のホームステイでは、水道・電気・ガス・トイレのない生活を体験しましたが、不便だとは感じても「貧しい」とは全く感じませんでした。村の生活では確かに日本に比べれば「もの」は少ないかもしれませんが、日本では感じられない「満足感」を感じました。どこからともなく子どもたちの笑い声やじゃれ合う声が聞こえてくる、すごく幸せな時間が流れていました。自分のイメージしていた国際協力は、勝手な基準から「幸せ」や「豊かさ」を押し付けようとする一方的なエゴでしかなかったと感じました。

また、人の温かさを強く感じました。生活は決して楽ではない中で、私たちを受け入れてくれた村の人たちの懐の深さ、別れのときに本当に涙を流して「帰らないで」と言ってくれたお母さんの優しさ、にっこり笑って「世界中みんなが友達」と話してくれたお父さん、お金がない私たちを追いはらわず最高のもてなしをしてくれたレストランのお兄さん…。たくさんの人に親切にしてもらいました。「１度アフリカの水を飲んだ者は、再びアフリカに帰る」とよく言われますが、私自身「アフリカン・ホスピタリティー」を実際肌で感じて、アフリカではみんなが、仲が良いとか付き合いが長いということに関係なく自分以外の人をもてなそう、喜ばそうとしてくれるので、そういうもてなしや温かさに触れた人、言い換えるとそういった「おいしい水」のようなものを１度味わった人が、今度は自分が何かおもてなしのお返しがしたくなったり、あるいはその温かさが懐かしくてまたアフリカを訪れたくなるということではないかと思います。損だとか得だとかそういうこと以前に、人に喜んでもらいたいというその純粋な気持ちがたくさんの人を惹きつけるのだと感じます。

水道がなく雨水を飲むしかなかったりスラムが存在していたりと、確かに改善できればいいと思う部分はたくさんあります。ただ、知っておかなければならないのは、そこでの暮らしが単に貧しくひもじいものなのではなく、そこにはまた日本とは違う幸せがあるということです。、もっと現地の生活や文化を知った上で、「押し付け」の支援ではなく、共に互いのいい部分を吸収する支援の形を模索していくことが重要だと感じました。

この３週間の貴重な体験を、これからの自分の進路に生かしていきたいです。